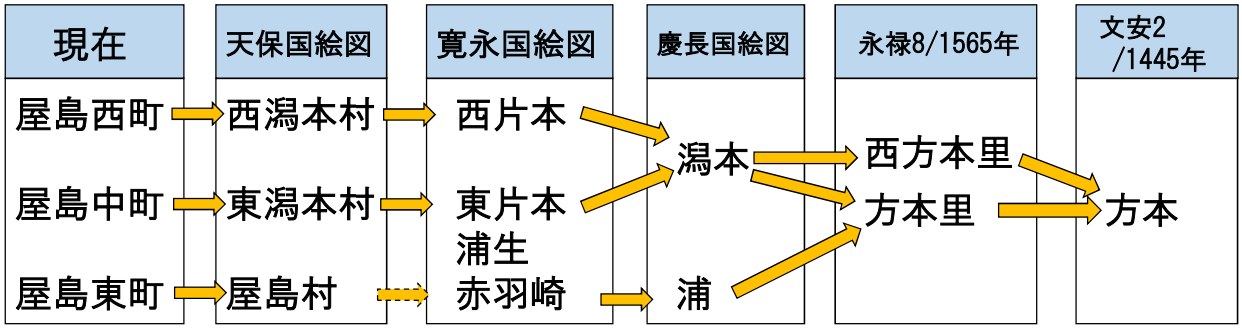
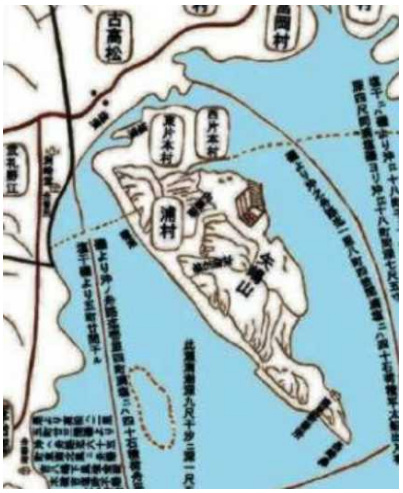
２－４. 中世後期～近世の村落構成と景観



天保国絵図
国立公文書館デジタルアーカイブ



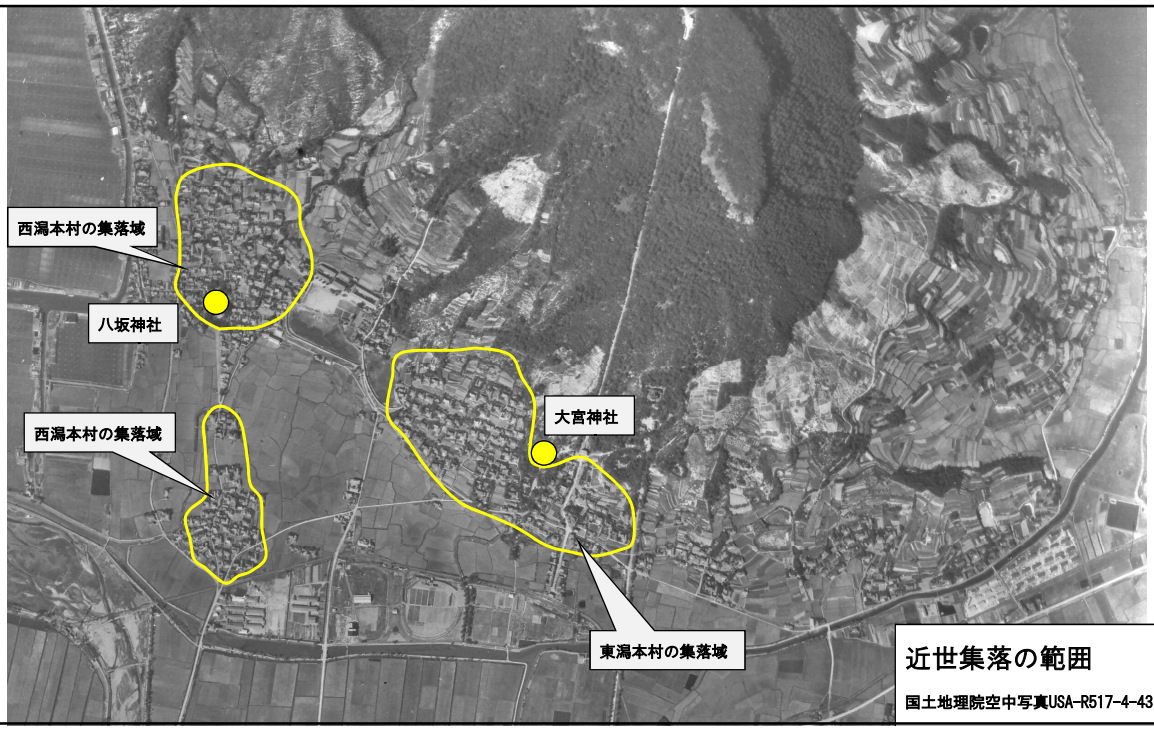
正保国絵図
田中健二2022

慶長国絵図
田中健二2022

地域単位の変化

・15世紀・・・・・方本に多数の港湾関係者が居住
・16世紀・・・・・方本から西方本が分立
・17世紀・・・・・（東）潟本村から浦村が分立

中世には潟元湾に面した地域単位「方本」が中心であり、次第に方本から西方本が分立し、近世村落に至るという道筋は、やはり潟元湾に面したエリアに集中する古代～中世前期の遺跡のあり方を、そのまま継承するように見える



近世集落の範囲

国土地理院空中写真USA-R517-4-43を加工

２－５.「屋島内裏」の候補地

あやしの民の家を皇居とするに足らざれば、暫くは御船を以て御所とす。大臣殿以下の月卿雲客もしづが伏しどに夜を明かし、海人の苫屋に日を送り、草枕、梶枕、浪に濡れ、露にしほれてぞ明かし暮らし給ひける。　『延慶本 平家物語』

安徳天皇は船に留まり、平氏一門は「海人の苫屋（船頭・漁師や塩づくりの人々の粗末な小屋）」や「賤が臥所（賤しい身分の者の寝所」で起居して日々を過ごしていた

・御座船を安定して停泊できる水域（波穏やかな水域）

・義経軍の屋島襲撃に臨み、田口成良が「忽ぎ此の御所を出でさせ給ひて、御舟にめされ候ふべし」と言ったこと（御所と船着場が近い）

「屋島内裏」は潟元湾に近接した場所にあったと推測される

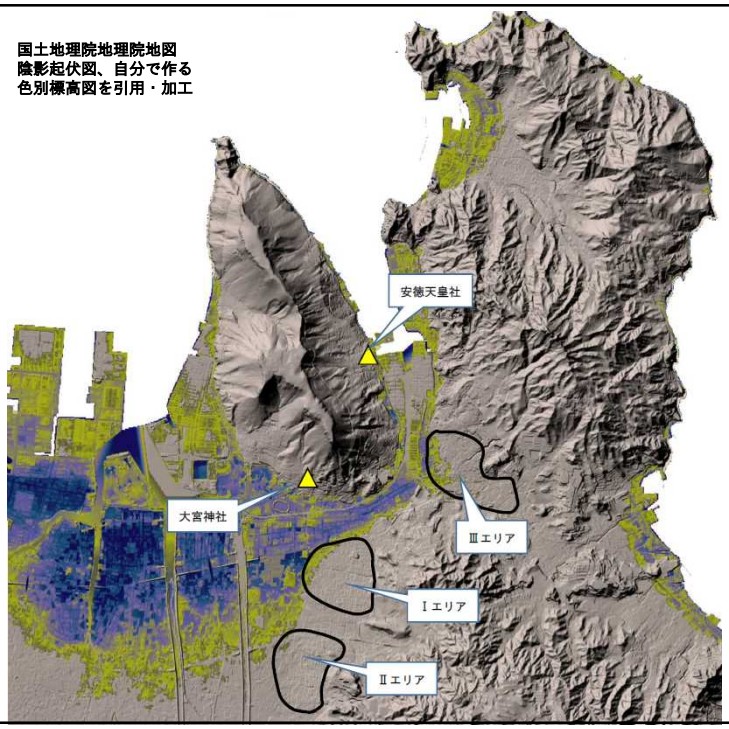
「屋島内裏」は中世後期～近世の方本（東潟本村）集落か、西方本（西潟本村）集落のいずれかの範囲内で、その位置を推定するのがよいと思われる

『吾妻鏡』・『平家物語』の記述からの手がかり

塩干潟一つへだてて、むれ・高松と云ふ処に焼亡あり。「あはや焼亡よ」と云ひもはてねば、成良申しけるは、「今の焼亡はあやまちにては候はじ。源氏の勢、既に近付きて所々に火係けて焼き払ふと覚え候ふ。定めて大勢にてぞ候ふらん。いかさまにも忽ぎ此の御所を出でさせ給ひて、御舟にめされ候ふべし」と申しければ、「尤もさるべし」とて、先帝を初め進らせて、女院・北政所・大臣殿以下の人々、屋嶋の御所の惣門の渚より、御船にめす。　『延慶本 平家物語』

(a) 高松郷と牟礼郷の集落（民屋）が目視できるような場所にある
→「むれ、高松と云ふ処」が具体的にどこを指すのか？

(b) 船を着岸できる海岸線と「屋島内裏」との間に「惣門・宮門」がある
→「御所の惣門の渚」はどこか？



「屋島内裏」

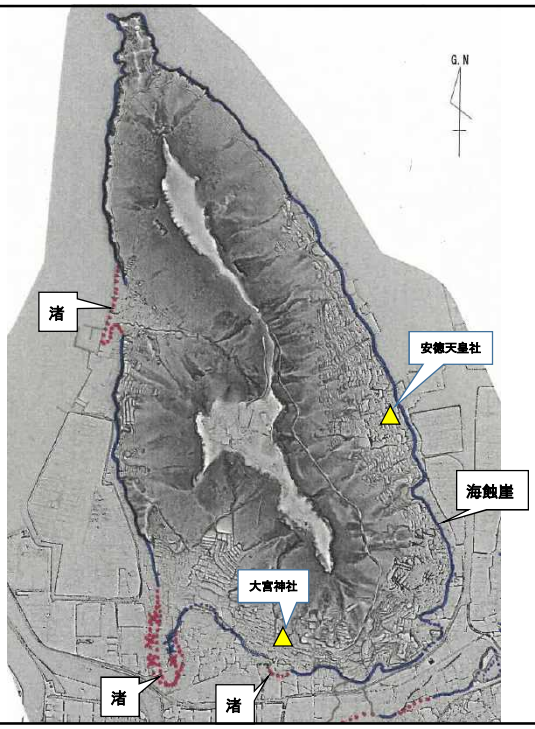
Ⅰ～Ⅲエリアが目視できるような位置にあったのではないか

■安徳天皇社（伝承地）

南側の尾根に遮られ、Ⅰ・Ⅱエリアは全く見えない

■大宮神社（方本中心部）

Ⅰ・Ⅱエリアは目前、Ⅲエリアは微妙だが、火の手は目視できたか



◆屋島を取り巻く段差（海蝕崖）

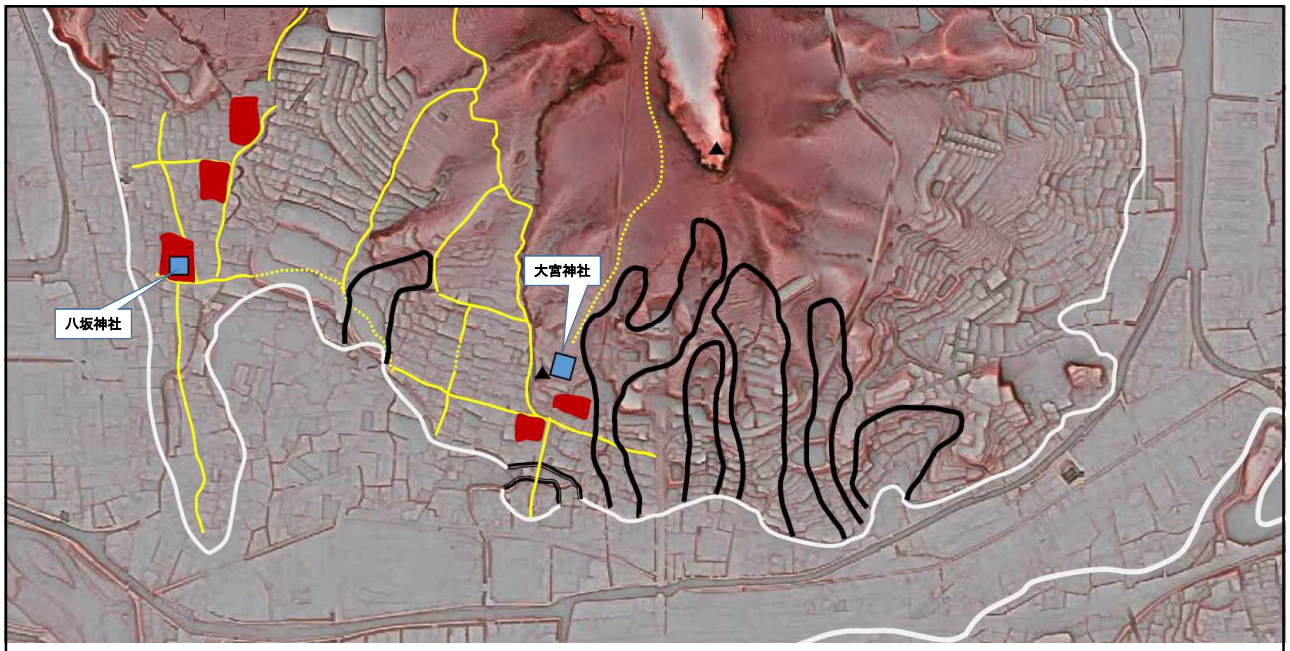
「御所の惣門の渚より、御船にめす」というような動きは難しい

安徳天皇社（伝承地）

■大宮神社前・潟元砂堆のなだらかな汀線

「御所の惣門の渚より、御船にめす」というスムーズな動きは可能

「仮設的ながら、大型掘立柱建物を伴う30～40m四方程度の敷地」というイメージを重ねられるような場所が、大宮神社周辺と潟元砂堆付け根周辺で想定できるかどうか

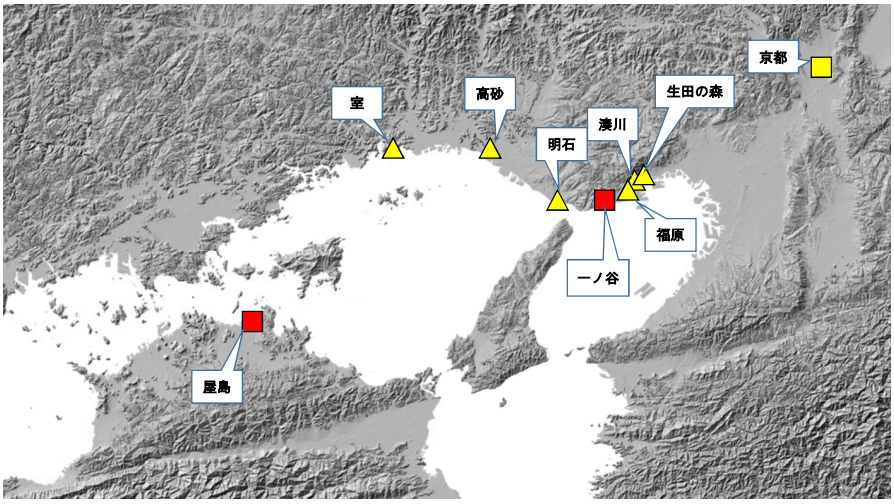


高松市教育委員会2019掲載
の赤色立体地図特許第
3670274号を使用

屋敷地想定地

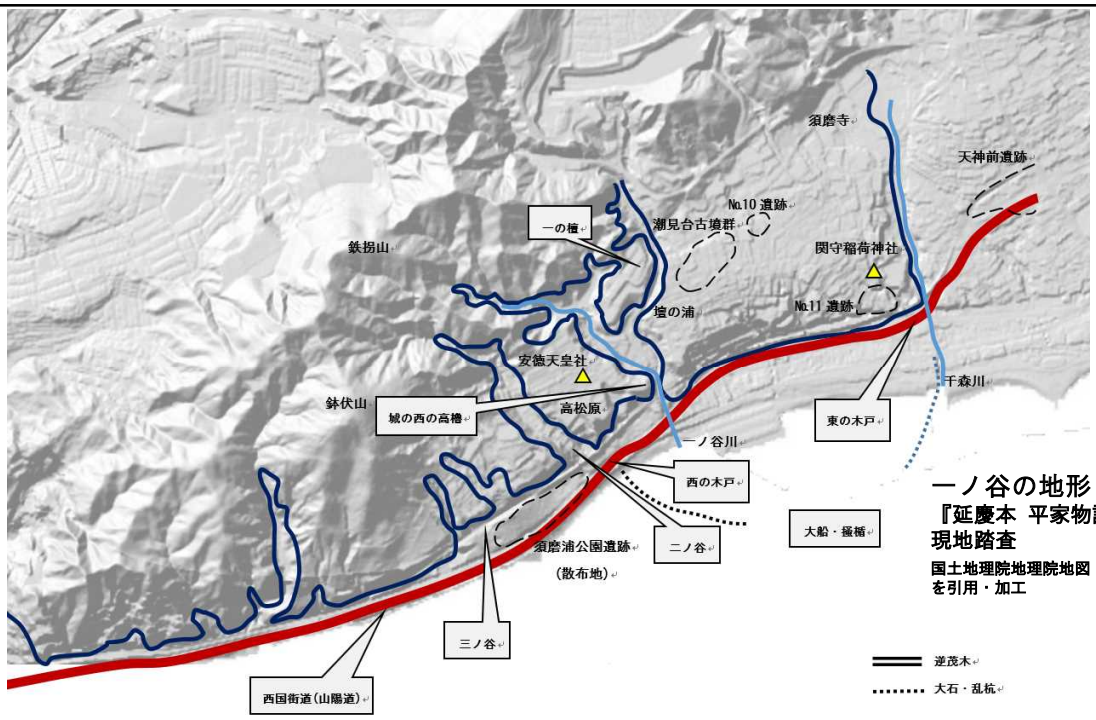
２－６.「城郭」の可能性　一ノ谷との比較検討

水島・室山での戦勝と、その後の木曽義仲の敗死という有利な情勢を踏まえ、元暦1/1184年1月、平氏軍は屋島から摂津国福原もしくは一ノ谷へと拠点を移す



国土地理院地理院地図　陰影起伏図
を引用・加工

『延慶本 平家物語』に記された平氏軍による一ノ谷と周辺の布陣



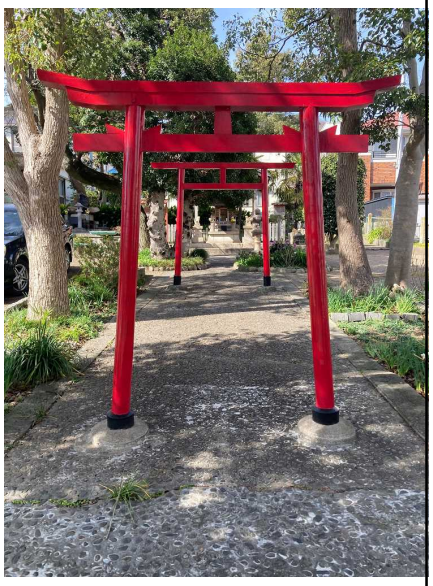
一ノ谷の地形と「城郭」

『延慶本 平家物語』を参照し、現地踏査

国土地理院地理院地図　陰影起伏図を引用・加工

「一の樋」想定地から瀬戸内海を望む

「一の檀」想定地　背後は鉢伏山



安徳天皇社

一ノ谷出口に迫る「高松原」の尾根

「壇の浦」から瀬戸内海を望む

一ノ谷の「城郭」

1）城地の基本構造は自然地形を基盤とする

戦国期の城郭のような大規模な地形改変を伴っていなかった

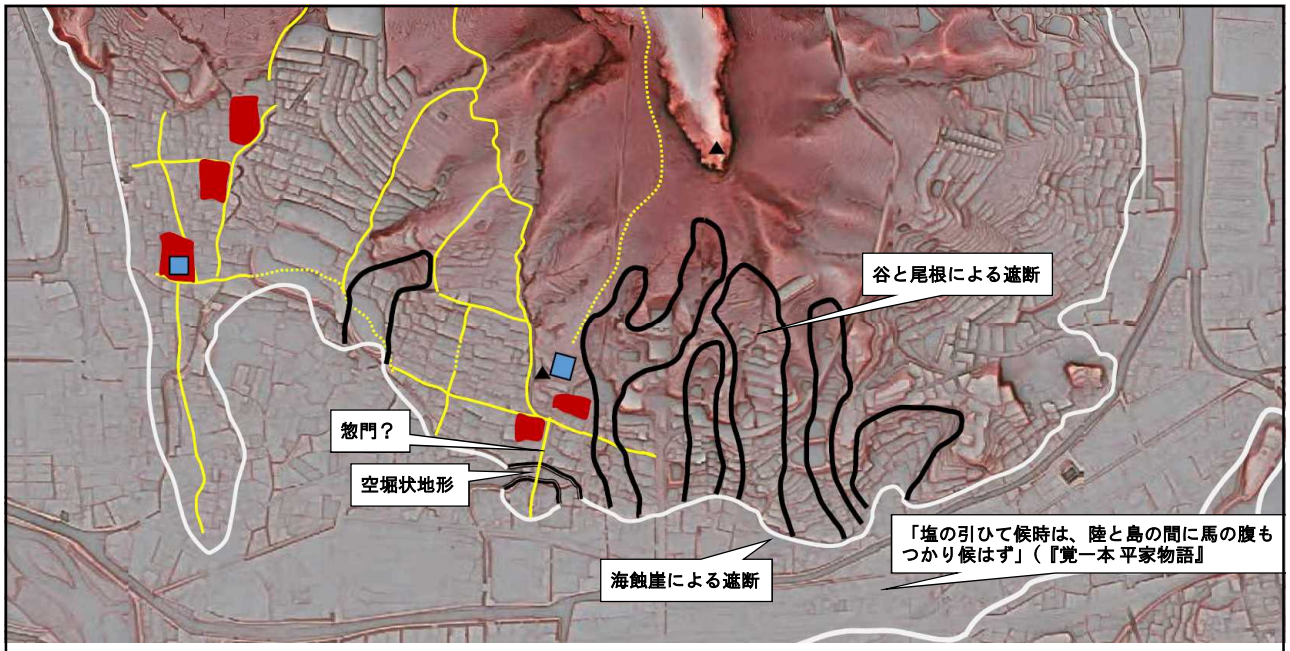
2）短時間で設置可能な仮設的な施設を加える

地形の特性を活かした陣地化が図られた

3）海域の防御線の構成要素として船が用いられる

周囲を陸に囲まれた閉鎖性海域の瀬戸内での戦闘のあり方を示す

田口成良の「此の屋島の浦は、吉き城廓にて候ふなり」という発言の意味を考える



高松市教育委員会2019掲載の赤色立体地図特許第3670274号を使用

屋島の「城郭」

1）屋島においても自然地形を基盤とした「城郭」が想定できる

屋島水道、汀線の崖、斜面の尾根・谷を利用

2）局所的に人工的な防御施設

大宮神社下の空堀状地形

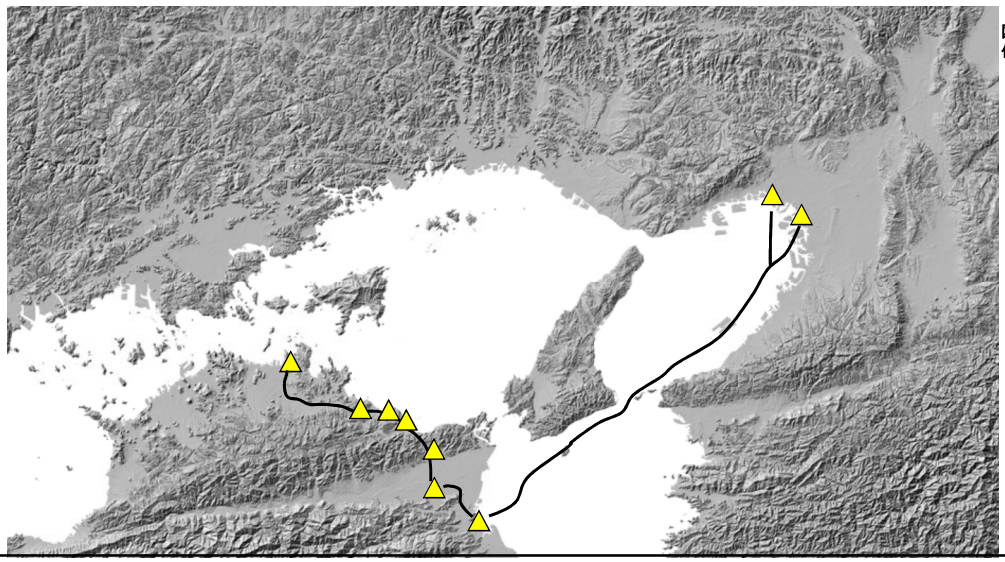
3）海上も取り込んだ防御線が敷かれていた可能性

合戦の過程で船上から再度上陸し、「焼け内裏の前に陣をとる」（延慶本）

〈3〉「屋島合戦」の推移

3－1．強い季節風の下での渡海

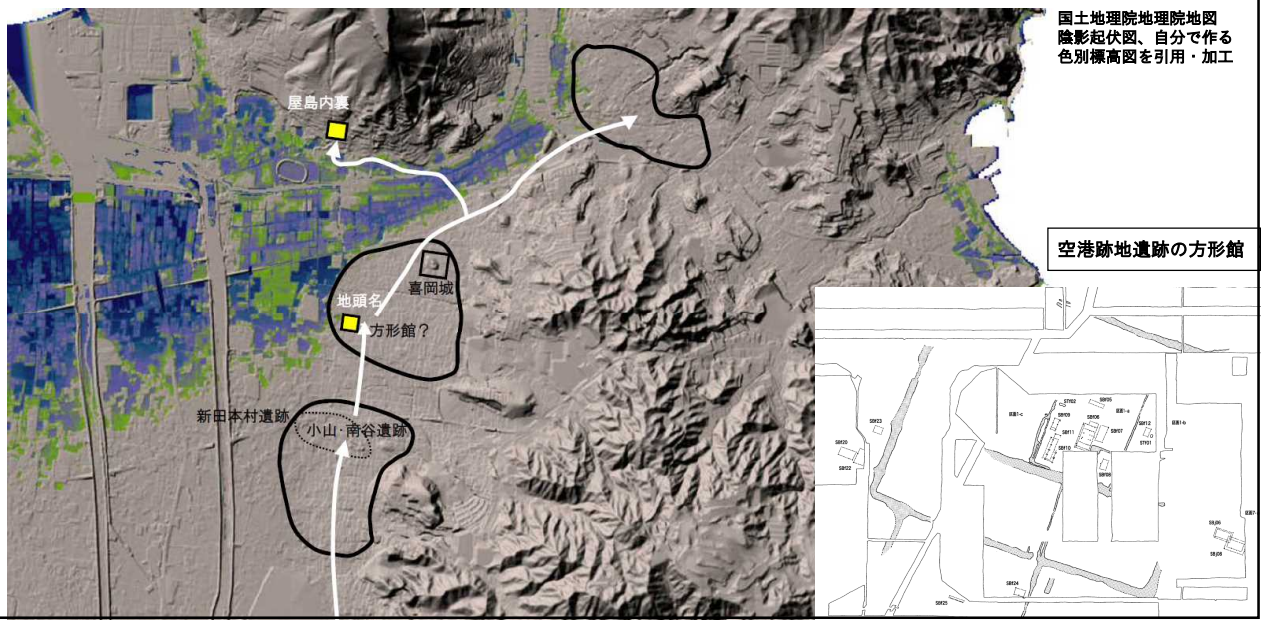
3－2．義経軍の進軍経路



国土地理院地理院地図　陰影起伏図を引用・加工

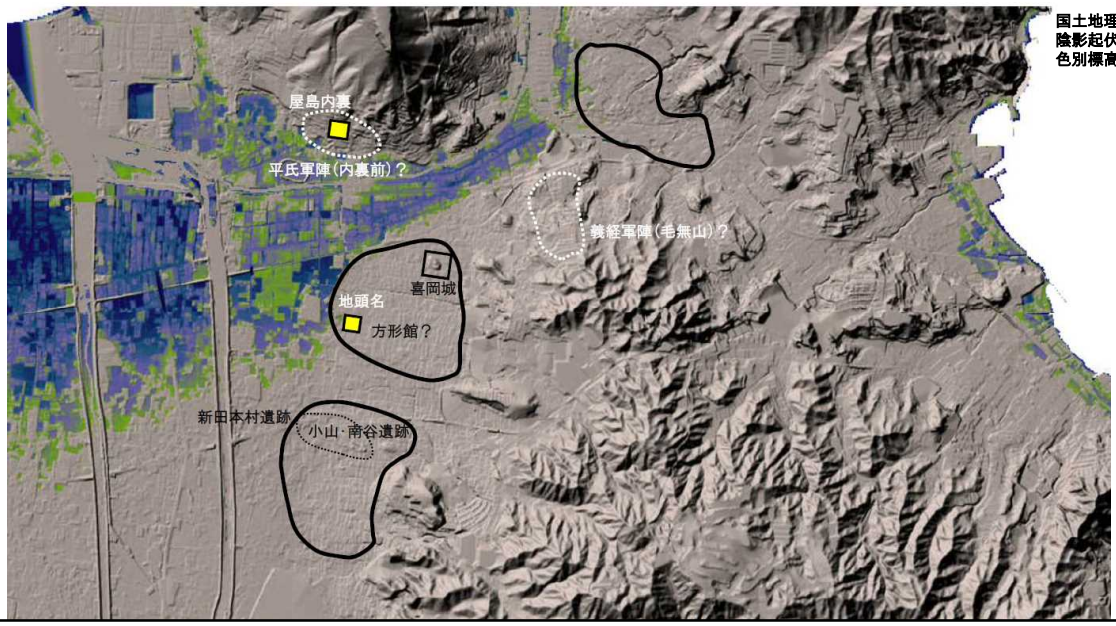
義経軍の進路

３－３.「牟礼、高松民屋」を焼く　　３－４. 干潟での合戦



国土地理院地理院地図
陰影起伏図、自分で作る
色別標高図を引用・加工

３－５. 毛無山（野山）の位置と役割

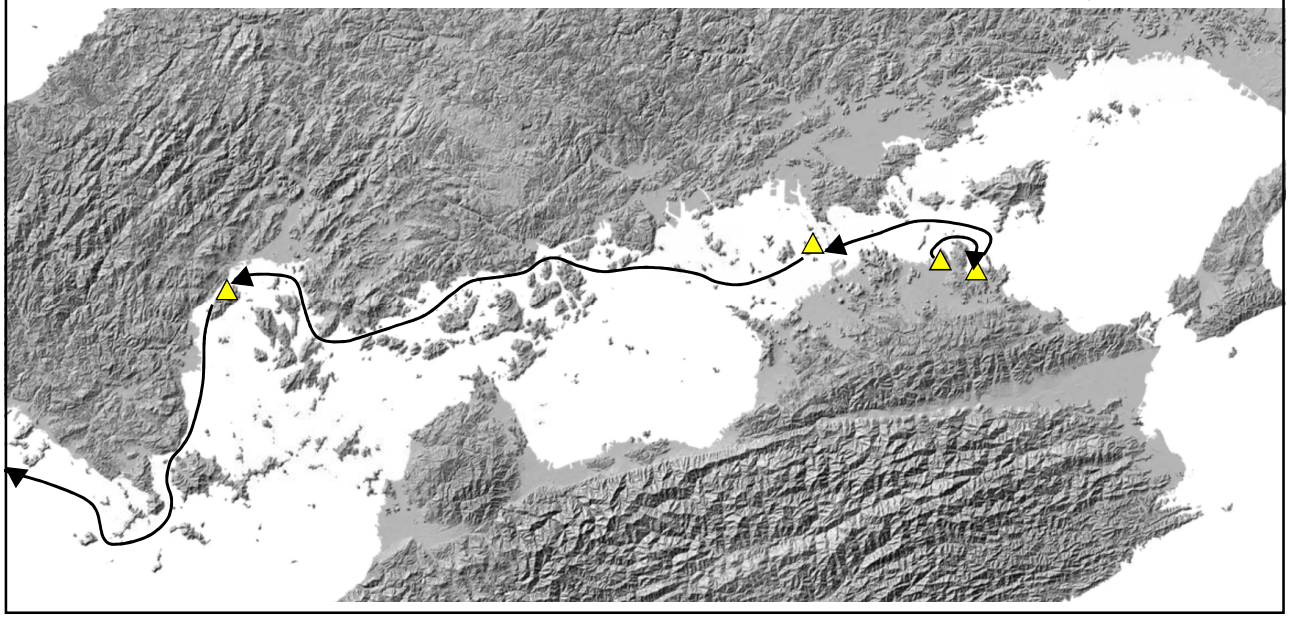


国土地理院地理院地図
陰影起伏図、自分で作る
色別標高図を引用・加工

３－６. 志度合戦から塩飽攻略

国土地理院地理院地図　陰影起伏図を引用・加工

平氏軍の退路



主要参考文献

・川合康2010（初出1996）『源平合戦の虚像を剥ぐ　治承・寿永内乱史研究』講談社

・石母田正1957『平家物語』岩波書店

・渡邊誠2019『高松市埋蔵文化財調査報告第200集　史跡天然記念物屋島―史跡天然記念物屋島基礎調査報告書Ⅲ―』高松市教育委員会

・千葉幸伸1978「四国の経塚―新資料紹介と若干の比較―」『瀬戸内海歴史民俗資料館年報1978』瀬戸内海歴史民俗資料館

・千葉幸伸1977「猪目透し八花形の蓋をもつ経筒―屋島新発見経塚と徳島滝の宮経塚資料―」『文化財協会報』第72号、香川県文化財保護協会

・村木二郎1998「近畿の経塚」『史林』第81巻第2号、史学研究会

・田中健二2022「高松城下町の形成・拡大と構造」『史集 高松』第2号、高松市教育委員会

『延慶本 平家物語』は、菊池眞一研究室のウェブサイトのテキストデータ（荒山慶一氏作成）を参照した